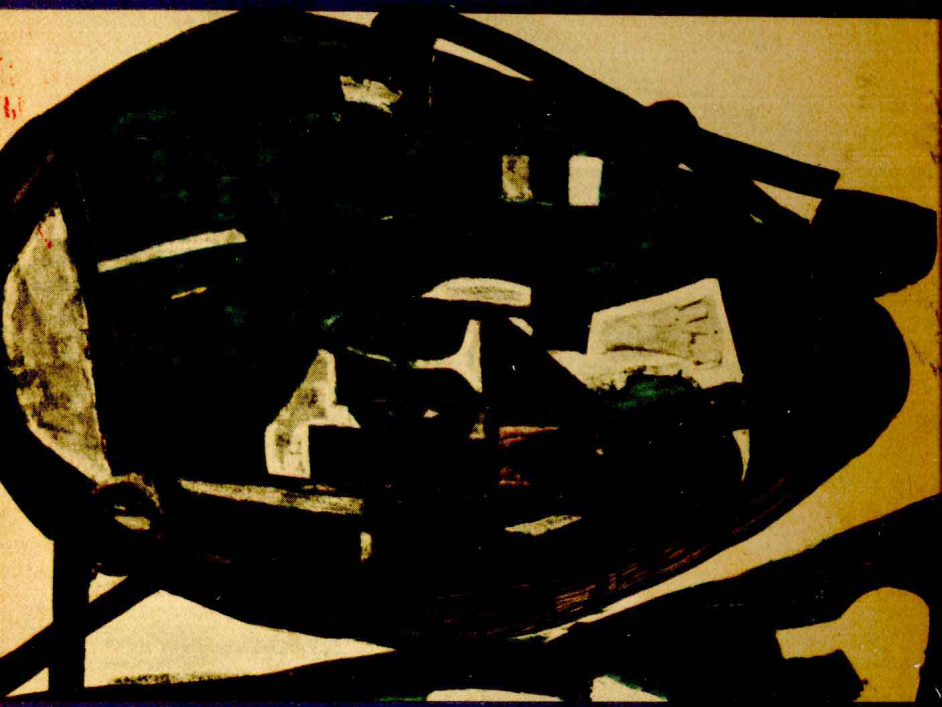
Ф. М. ДОСТОЕВСКИЙ



БРАТЬЯ КАРАМАЗОВЫ II

カラマゾフの兄弟

Ⅱ

ドストエフスキー
米川正夫譯

新版世界文學全集
17

新潮社版

新版世界文学全集 17

カラマゾフの兄弟 Ⅱ

昭和三十三年一月二十一日 印刷
昭和三十三年一月二十五日 発行

定価 参百五十円
地方売価 参百六拾円

訳者 米川正夫

発行者 東京都新宿区矢来町七一 佐藤義夫

発行所 東京都新宿区矢来町七一 株式会社新潮社
電話東京(268)七一一一～九番
振替東京 八〇八番

印刷 扶桑印刷株式会社
製本 荒木製本所

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Printed in Japan

目次

第八編　ミーチャ（承前）

第四　闇の中……七
第五　とっさの決心……一三
第六　おれが来たんだ……三〇
第七　争う余地なきもとの恋人……四〇
第八　夢幻境……六〇

第九編　予審

第一　官吏ペルホーチンの出世の緒（いとぐち）……七六
第二　警報……八四
第三　霊魂の彷徨　受難——一……九〇
第四　受難——二……一〇〇
第五　受難——三……一〇八

第六　袋の鼠……一二一
第七　ミーチャの大秘密――一笑に付さる……一二九
第八　証人の陳述『餓鬼』……一四二
第九　ミーチャの護送……一五二

第十編　少年の群

第一　コーリャ・クラソートキン……一五七
第二　幼きもの……一六二
第三　生徒達……一六八
第四　ジューチカ……一七七
第五　イリューシャの寝床の傍で……一八五
第六　早熟……二〇三
第七　イリューシャ……二一〇

第十一編　兄イヴァン

第一　グルーシェンカの家で……二一五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二　病める足……二二六
第三　悪魔の子……二三八
第四　頌歌と秘密……二四六
第五　あなたじゃない……二六一
第六　スメルヂャコフとの最初の面談……二六八
第七　二度目の訪問……二七八
第八　三度目の、最後の面談……二八九
第九　悪魔　イヴァンの悪夢……三〇六
第十　『それはあいつがいったんだ！』……三二五

第十二編　誤れる裁判

第一　運命の日……三三一
第二　危険なる証人……三三八
第三　医学鑑定　一フントの胡桃（くるみ）……三四七
第四　幸運の微笑……三五三

第五　不意の椿事……三六三
第六　検事の論告　性格論……三七三
第七　犯罪の径路……三八四
第八　スメルヂャコフ論……三八九
第九　全速力の心理解剖　疾走せるトロイカ　論告の終結……三九九
第十　弁護士の弁護　両刃の刀……四一一
第十一　金はなかった　強奪行為もなかった……四一五
第十二　それに殺人もなかった……四二二
第十三　思想の姦通者……四三〇
第十四　百姓どもが我を通した……四三九

第十三編　エピローグ

第一　ミーチャ救済の計画……四四六
第二　嘘がまことになった瞬間……四五二
第三　イリューシャの埋葬　アリョーシャの別辞……四六〇

カラマゾフの兄弟　Ⅱ

第八編　ミーチャ（承前）

第四　闇の中

彼はどこへ駆け出したのか？　それは知れきったことである。『おやじの家でなくって、ほかにあれのいるところがない。サムソノフの家からまっすぐに、親父のところへ走ったのだ。今となっては、もう疑う余地がない。あいつらの企らみも偽りも、すっかり見え透いている……』こういう想念が、嵐のように彼の頭を飛び過ぎた。マリヤの家の庭へは、もう立ち寄らなかった。『あそこへ寄る必要はない。決してそんな必要はない……いっさい他人を騒がせないようにしなくちゃ……それに、すぐ裏切りをして内通するからなあ……マリヤはあいつらの仲間に相違ない……スメルヂャコフだってそうだ、みんな買収されてるんだ！』

彼の頭にはまたべつな考えが湧き起った。彼は横町を抜けて、フョードルの邸を大きく一周し、ドミートロフスカヤ街へ出て小橋を渡り、まっすぐに淋しい裏通へ現われた。それは、がらんとした人気のない横町で、片側には隣家の菜園の編垣がつづき、片側にはフョードルの庭を囲む高い、丈夫な塀が聳えている。ここで彼は一つの場所を選び出した。それはかつて、悪臭ある女リザヴェータが乗り越したのと同じ場所らしい。この話は、彼もいい伝えによって知っていた。『あんな女でも越せたんだから、』どういうわけか、こんな想念が彼の頭を掠めた。『おれに越されないはずがない！』呆たせるかな、彼は一躍して、巧みに塀の上部へ手をかけた。そして、元気よく身をもたげて、ひらりと足をかけ、馬乗りに塀の上に跨った。庭の中には、ほど遠からぬあたりに湯殿があったが、あかりのついた母家の窓が、塀の上からよく見えた。『やはりそうだ、親父の寝室にあかりがついてる、あれはここに来てるんだ！』彼は塀から庭へ飛びおりた。グリゴーリイもスメルヂャコフも病気しているから（スメルヂャコフの病気も、あるいはほんとうかもしれぬ）、誰も聞きつけるものはないと承知していたけれど、彼は本能的に身をひそめて、一ところにじっと立ち尽しながら、耳を澄ましはじめた。しかし、死んだような沈黙があたりを領している上に、まるでわざとのように、そよとの風もない、げきとして静かな夜であった。

『静寂の囁きのみぞ聞ゆなり。』なぜかこんな詩の一節が、彼の頭を掠めた。『ただ誰か、俺の塀を越すところを見たものがなければいいが。おそらくないように思うけれど……』一分間ほどじっと立ち尽した後、彼はそっと庭草を踏んで歩き出した。自分で自分の足音に一歩一歩、耳を傾けなが

ら、足音を盗むようにして、木立や灌木を迂回しつつ、長いこと歩みつづけた。五分ばかりで、彼はあかりのついた窓の近くまでたどりついた。窓のすぐ下に、背の高い、みっちりと茂った接骨木や、木苺の大きな藪が、幾つか立っているのを覚えていた。家の正面の左側についている、内部から庭へ通ずる出口の戸は、ぴったり閉まっていた。彼は傍を通り過ぎる時、ことさら気をつけて、このことに注意した。やっと、藪のところまでたどりついたので、彼はその陰に身を潜めて、じっと息を凝らしていた。『今ちょっと待たなくちゃならん。』と彼は考えた。『もしおれの足音を聞きつけて、いま聞き耳を立てているとしたら、あれは空耳であったと思わせるために……どうかして咳や、くさめをしないように気をつけなくちゃ……』

彼は二分間ばかり待ってみたが、胸の動悸が激しくて、ときどき息も止まりそうなほどであった。

『駄目だ、動悸はやみやしない。』と彼は考えた。彼は藪の陰に立っていた。藪の前面は、窓からさすあかりにぱっと照し出されている。『木苺よ、ほんにきれいな苺の実！』なんのためとも知らず、彼はこんなことを口ずさんだ。やがて一歩一歩くぎるような静かな足どりで、そろっと窓に近寄って、爪立ちをした。フョードルの寝室の様子は、まるで掌をさすように、まざまざと彼の眼前に展開せられた。それは赤い衝立で、縦に端から端まで仕切られた、小さな部屋であった。フョードルはこの衝立を『支那出来』と呼んでいた。『支那出来』という言葉が、ミーチャの頭を掠めた。『あの衝立の向うに、グルーシェンカがいるのだ。』彼はフョードルの姿を仔細に眺めはじめた。老人は、まだミーチャの一ども見たことがない、新しい縞絹の部屋着を着て、同じく房つきの絹紐を腰に巻いていた。部屋着の襟の陰からは、きれいなしゃれたワイシャツ、オランダの細地のワイシャツが覗いて、金のカフス・ボタンが光っている。頭には、かつてアリョーシャが見たと同じ、赤い包帯が依然として巻いてある。『しゃれのめしてやがる』とミーチャは思った。

フョードルは、何やら考え込んでいるらしい様子で、窓ちかく立っていたが、急にぶるっと首を振り上げて、心も持ち耳を傾けた。しかし、何一つ耳に入らないので、テーブルに近寄って、ガラスの瓶から、杯はんぶんくらいコニヤクを注ぎ、ぐいと一息に飲み乾した。それから、胸一ぱいの息をして、また暫くじっと突っ立っていたが、やがて窓と窓の間にかけてある鏡の方へふらふらと近づいて、例の赤い包帯を右手でちょっと額から持ち上げ、まだなおりきらない打身やかさぶたを、と見こう見していた。『親父ひとりきりだ』とミーチャは考えた。『どうも、ひとりきりに相違ないようだ。』フョードルは鏡から離れると、急に窓の方へ振り向いて、じっと見すかしはじめた。ミーチャはすばやく物陰へ飛びのいた。

『ことによったら、あれは衝立の陰でもう寝てるのかもし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れない。』彼はちくりと胸を刺されるような気がした。フォードルは窓を離れた。『親父が窓を覗いているのは、あれを見つけ出そうとしてるのだ。してみると、あれは来ていない。親父が暗闇の中を覗いてみるわけがないからな……つまり、焦燥に心を掻きむしられてるんだ……』ミーチャはさっそく窓の傍へ駆け寄って、再び室内を眺めはじめた。老人は屈託そうな様子をして、もうテーブルの前に坐っていた。しまいには肘杖ついて、右の掌を頬にあてがった。ミーチャは貪るように見入った。

『ひとりだ、ひとりだ！』と彼はまた断言した。『もしあれがここにいるのなら、親父はもっと違った顔つきをしてるはずだ。』奇妙なことではあるが、彼女がここにいないと思うと、とつぜん何かしら意味もない、奇怪な憤懣の情が、彼の心に湧きたって来た。『いや、これはあれがいないからじゃない。』ミーチャは即座に自分で解釈して、自分に答えた。『つまり、あれが来てるか来てないか、どうしても確かにつき留めることが出来ないからだ。』ミーチャの理性は、この瞬間なみはずれて明晰になり、いっさいのものをきわめて微細な点まで考量し、一点一画をも見おとすことなく取り入れた。しかし、焦燥が、未知と不定の焦燥が、計り知ることの出来ない速度をもって、彼の心に刻刻つのってゆくのであった。『一体あれはほんとうに、ここにいるのかいないのか？』という疑いは、毒々しく彼の胸に煮え返るのであった。彼はとつぜん腹を決めて、手を差し伸べ、ほとほとと窓の枠を叩いた。スメルヂャコフと老人との間に決められた、合図のノックをしたのである。はじめの二つを静かに、しまいの三つを少し早目に、とんとんとんとたたいた——つまり、グルーシェンカが来たという、知らせの合図である。老人はぎっくりして、ぶるっと首を振り上げると、すばやく飛びあがって、窓の方へ走りよった。ミーチャは物陰へ飛びのいた。フォードルは窓をあけて、頭をすっかり外へ突き出した。

「グルーシェンカ、お前か、お前なのか一体？」と彼は妙に顫える声で、なかば囁くようにいった。「どこにいるのだ、グルーシェンカ、これ、どこにいるのだ？」

彼はむやみに興奮して、息を切らせていた。

『一人きりだ！』とミーチャは考えた。

「一体どこにいるのだ？」と老人は再び叫んで、一そう首を外へ突き出した。彼は肩まで窓の外へ覗かせながら、きょろきょろと左右を見回すのであった。「ここへおいで、わしはいい贈物をこしらえて、待っておったよ。おいで、見せてやるから！……」

『あれは、例の三千ルーブリの包みのことをいっているんだ。』こんな考えが、ちらとミーチャの頭に閃いた。

「これ、どこにいるのだ？……戸の傍にでもいるのかな？すぐ開けてやるよ！」

老人はもうほとんど、窓から乗り出さないばかりの勢いで、庭に通ずる戸口のある右手を眺めながら、暗闇の中を

見すかそうと骨折っていた。もう一瞬の後には、彼はグルーシェンカの返事も待たずに、必ず駆け出して戸を開けるに相違ない。ミーチャはわきの方から身動きもしないで見つめていた。彼があれほど忌み嫌っていた老人の横顔、――だらりと下った喉団子、鉤なりの鼻、甘い期待の微笑を浮べた唇、これらすべてのものが、左の方からさす室内のランプの斜めな光線に、くっきりと照し出されたのである。恐ろしい凶暴な憎悪の念が、突然ミーチャの心に湧き立った。

『あいつだ、あいつが俺の競争者だ、あれが俺の迫害者だ、俺の生活の迫害者だ！』これは、彼がかつてアリョーシャに向って、一種の予覚でも感じたかのように断言した憎悪、――突発的な復讐の念に充ちた、狂暴な憎悪の襲来であった。彼は四日まえ四阿で、アリョーシャと対談した時に、『お父さんを殺すなんて、どうしてそんなことがいえるのです？』という弟の問に対して、

『いや、俺にもわからない、自分でもわからない、』と彼は答えた。『もしかしたら、殺さないかも知れんし、またもしかしたら、殺すかも知れん。ただな、いざという瞬間に、親父の顔が憎らしくてたまらなくなりはしないか、とこう思って心配してるんだ。俺はあの喉団子や、あの鼻や、あの眼や、あの厚かましい皮肉が、憎らしくてたまらない、あの男の人物が厭らしいのだ。俺はこれを恐れている。こればかりは抑え切れないからなあ。』

こうした嫌悪の念が、堪え難いまでに募ってきた。ミーチャはもはやわれを忘れて、不意にポケットから銅の杵を取り出した。……

……

『神様があのとき、僕を守って下すったんだろう。』後になって、ミーチャは自分でこういった。ちょうどそのとき、病めるグリゴーリイが、病床で眼をさましたのである。その日の夕方、彼はスメルヂャコフがイヴァンに話した例の治療法をおこなった。つまり、何か強い秘薬を混じたウォートカを、妻の力を借りて全身に磨り込んだ後、その残りを妻の念ずる祈禱とともに飲み干して、それから眠りに就いたのである。マルファもやはりその薬を飲んだが、元来いけぬ口なので、そのまま夫のかたわらで、死んだように寝込んでしまった。ところが、突然、思いがけなくグリゴーリイは夜中に眼をさました。そして、一分間ばかり思案した後、恐ろしい痛みを腰の辺に感じたにも拘らず、寝床の上に身を起した。それから、また何やら思いめぐらした末、立ちあがって、手早く着替えをした。ことによったら、『こうした険呑なとき』誰ひとり家の番をするものがないのに、自分は安閑として寝込んでいるといったような、良心の苛責に胸を刺されたのかもしれない。

癲癇のために総身を打ちひしがれたスメルヂャコフは、隣りの小部屋で身動きもせずに臥っている。マルファもびくりともしなかった。『婆さん弱り込んどるな。』グリゴー

リイは妻を見やって、そう思った。そして、喉をくっくっと鳴らしながら、入口の階段へ出た。もちろん、ちょっと階段から様子を見るだけのつもりだった。というのは、腰ぜんたいと右足の痛みが堪え難くて、いっかな歩くことが出来なかったからである。しかし、ちょうどその時、彼は庭へ通ずる小門に、晩から鍵をかけないでいるのに気がついた。彼はこの上なく厳重で正確な男で、一定の規則と多年の習慣に凝り固っていたから、痛みのためにびっこを引いたり、体を縮めたりしながら、階段を下りて庭の方へ行った。果して、小門はまるで開けっ放しであった。彼は機械的に、庭の中へ足を踏み入れた。それは、眼に何か映じたのか、耳に物音が入ったのか、原因はよくわからないけれど、とにかく、ふと左手の方を眺めると、主人の居間の窓が開いている。窓はがらんとして、もう誰もその中から覗いてはいなかった。

『どうして開いてるんだろう、もう夏でもないのに！』とグリゴーリイは考えた。

と、ちょうどその瞬間、何やら異様なものが、彼の真向いに当る庭の中を、突然ちらちら動きはじめた。彼のところから四十歩ばかり隔てた暗闇の中を、何か人間らしいものが駆け抜けている。何かの影が非常な速さですっすっと動く。

「大変だ！」といってグリゴーリイは、腰の痛いのも忘れながら、曲者の行く手を遮るつもりで、前後の考えもなく駆け出した。

彼は近道をとった。見たところ、庭の案内は彼の方が曲者よりもくわしいようであった。曲者は、湯殿を目ざして走っていたが、やがて湯殿の向うへ駆け抜けて、塀に飛びかかった……グリゴーリイは、その姿を見失わぬように跡をつけながら、われを忘れて走って行った。ちょうど曲者が塀を乗り越した瞬間に、彼は塀の下まで駆け付けた。グリゴーリイは夢中になって飛びかかり、両手で曲者の足にしかと絡みついた。

案の定、予覚は彼を欺かなかった。曲者の見分けがついた。それはあの『ならずものの親殺し』であった。

「親殺し！」と老僕は、近所合壁へ鳴り響くほどわめき立てた。

しかし、彼が声を立て得たのは、これだけであった。突然、彼は雷にでも打たれたもののように、どうと倒れた。ミーチャは再び庭へ飛び下りて、被害者の上に屈み込んだ。ミーチャの手には銅の杵があったが、彼はそれを機械的に草の中へ投げ出した。杵はグリゴーリイから二歩ばかり離れたところへ落ちたが、それは草の中ではなく、径の上の、最も目立ちやすい場所であった。幾秒かの間、彼は自分の前に倒れている老僕を仔細に点検した。老僕の頭はすっかり血みどろであった。ミーチャは手を伸して触ってみた。彼はそのとき、老人の頭蓋骨を割ってしまったのか、それとも、ただちょっと杵で額を傷けたばかりか、『十分に確

め』たかったのである。これは、彼自身あとになって、はっきり思い起した。けれど、血はだくだくと止め度なく噴き出して、その熱い流れは、たちまちミーチャの慄える指を染めてしまった。彼はホフラコーヴァ夫人訪問の際に用意した、白い新しいハンカチをポケットから取り出して、老人の頭へ押しあてながら、額や顔から血を拭きとろうと、無意味な努力をした（これもあとから思い出したことである）。しかし、ハンカチも見る見る、ずぶずぶに濡れてしまった。

『ああ、なんのためにこんなことをしてるんだ？』ミーチャはふいと我に返った。『もし割ってしまったとしても、今それを確めるわけにゆきゃしない……それに、もうこうなったら同じことじゃないか？』とつぜん絶望に充ちた心もちで、彼はこうつけたした。『殺したものは殺したのさ……運の悪いところへ爺さんが来合したのだ、じっとそこに臥てるがいい！』と大きな声でいって、彼はいきなり塀に跳りかかり、横町へひらりと飛びおりると、そのままっしぐらに駆け出した。

彼は、血でずぶずぶになったハンカチを丸めて、右手に握っていたが、走りながらフロックのうしろ衣嚢へ押し込んだ。彼は飛ぶように走った。その夜まっ暗な往来で、稀れに彼に行き会った幾人かの通行人は、猛烈な勢いで走り過ぎた男があったことを、後になって思い出した。彼は再び、モローゾヴァの家をさして飛んで行ったのである。さきほどフェーニャは、彼の立ち去ったすぐ後で、門番頭のナザールのところへ飛んで行き、『後生一生のお願いだから、あの大尉さんを今日も明日も、決して通さないでちょうだい』と哀願した。ナザールは様子を聞いて、さっそく承知したけれど、運悪く二階の奥さんに呼ばれて、ちょっとその方へ出かけた。その途中で、つい近ごろ田舎から出たばかりの甥、二十ばかりの若者に出会ったので、代りに門の番をするようにいいつけたが、大尉さんのことはすっかり忘れてしまった。門の傍まで駆けつけたミーチャは、どんどん戸をたたき始めた。若者はすぐに彼の顔を見分けた。ミーチャが一度ならず、この若者に茶代を与えたからである。若者は、さっそくくぐりを開けて、中へ通し、陽気な微笑を浮べながら、『アグラフェーナ様はいまお留守ですよ』と警戒するような調子で、急いでこう知らせた。

「どこへ行ったんだい、プローホル？」とミーチャはとつぜん足を停めた。

「さっき二時間ほど前に、チモフェイの馬車で、モークロエへおいでになりました。」

「何しに？」とミーチャは叫んだ。

「そりゃあわかりませんなあ。なんでも将校とやらのところですよ。誰だか奥様に来いといって、そこから馬車をよこしましたんで……」

ミーチャは若者をうち捨てて、気ちがいのようにフェーニャのもとをさして駆け出した。

第五　とっさの決心

フェーニャは祖母と一しょに台所にいた、二人とも寝支度をしているところであった。彼らはナザールを頼みにして、今度も内から戸締りをしないでいた。ミーチャは駆け込むやいなや、フェーニャに跳りかかって、しっかりとその喉を抑えた。

「さあ、すぐ白状しろ、あれはどこにいる、いま誰と一しょにモークロエにいるのだ？」と彼は前後を忘れて叫んだ。

二人の女はきゃっと声を立てた。

「はい、申します、はい、ドミートリイ様、今すぐ何もかも申します、決して隠し立てはいたしません。」死ぬほど驚かされたフェーニャは、早口にこう言った。「奥様は、モークロエの将校さんのところへおいでになりました。」

「将校さんて誰だ？」ミーチャは猛りたった。

「もとの将校さんでございます、あのもとのいい人でございます。五年まえに奥さんを棄てて行ってしまった……」依然たる早口で、フェーニャはべらべらとしゃべった。

ミーチャは、女の喉を絞めていた手をひいた。彼は死人のような青い顔をして、言葉もなくフェーニャの前に立っていたが、その眼つきで見ると、彼が一瞬にしてすべてを悟ったことが察しられた。彼は一ことも聞かないうちに、いっさいのことを、ほんとうにいっさいのことを、底の底までも悟ったのである。何もかも見抜いたのである。しかし、哀れなフェーニャは、この瞬間かれが悟ったか悟らないか、そんなことを詮議している余裕はなかった。彼女はミーチャが駆け込んだ時、箱の上に坐っていたが、今もやはりそのままの姿勢で全身を慄わせながら、わが身を庇おうとするかのように、両手をさし伸べていた。彼女はその姿勢のままで、化石になったように見えた。恐怖のために、瞳孔の拡がったような慴えた眼で、じっと食い入るように彼の顔を見つめていた。ミーチャは恐ろしい形相に、かてて加えて、両手を血だらけにしているではないか。おまけに、走って来る途中、額の汗を拭くのに、その手で顔に触ったと見え、額にも右の頬にも血の痕が赤くついていた。フェーニャは、今にもヒステリイが起りそうになった。下働きの老婆は、席から跳りあがったまま、意識を失って、気ちがいのような顔つきをして立っていた。ミーチャは一分間ほど、ぼんやり立っていたが、とつぜん機械的に、フェーニャの傍らの椅子に腰をおろした。

彼はじっと坐ったまま、何か思いめぐらしている、というよりも、何かこう非常に驚いて、ぼうとなったというようなふうであった。しかし、いっさいは火を見るよりも明らかである。あの将校なのだ、――自分はこの男のことを知っていた、何もかもよく知っていた、当のグルーシェンカから聞いて知っていた。一月前に手紙の来たことも知

っていたのだ。つまり、一月、まる一月の間、今日この新しい男の到着するまで、このことは深く自分に隠して運ばれていたのだ。それだのに、自分はこの男のことを夢にも考えないでいた！　一体どうして、ほんとうにどうして自分は、この男のことを考えずにいられたのだろう？　どうして自分はあのとき造作もなく、この男のことを忘れたのだろう？　知ると同時に忘れたのだろう？　これが彼の面前に、奇跡かなんぞのように立ち塞がっている問題であった。彼は真に慄然として、身うちの寒くなるのを覚えながら、この奇跡を見守るのであった。

が、急に彼はおとなしい、愛想のいい子供のような調子で、静かにつつましく、フェーニャに向って話しかけた。たったいま自分がこの女を驚かし、辱しめ、苦しめたことは、まるで忘れてしまったようなふうであった。とつぜん彼は、今のような状況にある人としては不思議なくらい、極度に正確な調子で、フェーニャにいろいろと訊きはじめた。またフェーニャも、彼の血みどろな手を、けげんそうに見つめてはいたけれど、同様に不思議なほど気さくな調子で、一つ一つの質問に対して、はきはき答えるばかりか、かえって少しも早く『正真正銘の』事実を、洗いざらい吐き出そうとするかのようであった。彼女は、こまごまとしたすべての事実を物語るのに、次第に一種の快感を感じはじめた。しかもそれは、決して彼を苦しめようという心持のためでなく、むしろ出来るだけ彼のために尽そうと、あせっているからであった。彼女はきょう一日の出来事を、細大もらさず話して聞かせた。ラキーチンとアリョーシャが訪ねて来たことから、彼女、フェーニャが見張りに立っていたこと、女主人が出立した時の模様、それからグルーシェンカが窓からアリョーシャに向って、ミーチャによろしくいってくれ、そして『わたしがあの人をたった一ときと叫んだことなど物語った。ミーチャによろしくと聞いた時、彼はとつぜん薄笑いを洩らした。と、その蒼ざめた頬に、さっとくれないが散った。その時フェーニャは、自分の好奇心に対する後の報いなど、少しも恐れずにこういった。

「まあ、あなたなんという手をしてらっしゃるのでしょう、ドミートリイ様、まるで血だらけじゃございませんか……」

「ああ。」ぼんやりと自分の手を見回しながら、ミーチャは機械的に答えたが、その手のことも、フェーニャの間も、すぐに忘れてしまった。

彼はまた沈黙に陥った。ここへ駆け込んでから、もう二十分ばかりたった。さきほどの驚愕は鎮まり果てて、その代り、何かしら新しい確固たる決心が、彼の全幅を領したようなふうであった。とつぜん彼は席を立って、物思わしげに微笑した。

「旦那様、一体あなたはどうなすったのでございます？」またもや彼の手を指さしながら、フェーニャはこういった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com